

会津藩家老梶原平馬をめぐる女性

—山川二葉と水野貞—

遠藤 由紀子

The Women around Heima Kajiwara, Chief Retainer of the *Aizu-han* :
Focusing on Futaba Yamakawa and Tei Mizuno

Yukiko Endo

Heima Kajiwara, who was the chief retainer of the *Aizu-han* in the last days of the *Edo* period, disappeared suddenly in the beginning of the *Meiji* period. He had a child with Futaba Yamakawa in the *Edo* period and some children with Tei Mizuno in the *Meiji* period.

Futaba had been brought up under strictly 'Samurai' ethic of woman in the *Aizu-han* and worked in the Tokyo Women's College of Education. Tei was an advanced woman who founded a free, private elementary school in Nemuro, Hokkaido and worked to promote the importance of Education.

Recently the re-evaluation of Tei's work brought with it the discovery of the location of Heima's tomb. The discovery clarified what happened at the end of Heima's life. Both Futaba and Tei brought up their children while working and single. Both women did not adhere to the traditional conventions of marriage, and lived their lives without depending on their husband.

1. はじめに

明治5年(1872)8月、太政官より「学制」が發布された。この布告には、「一般ノ女子男子ト均シク教育ヲ被ラシムベキ事」とあり、女子教育に関する一大転換を示すものであった。

近世女子教育は、家庭中心の教育であり、多くの場合、知的教育ではなく、しつけ・訓育が女子の本分とされていた。原則として、他家に嫁し他家の人々に仕えるためには、自主性や個性などではなく、従順の徳が最重要であり、それが同時に処世の知恵であることを女訓は強調した(千住 1967:9)。つまり、封建社会において、女子にとって学問は不要とされ、あるいは否定されていた。

明治維新を迎え、江戸幕府を中心とする幕藩体制が崩壊した。明治政府は中央集権的な天皇制統一国家を成立させ、近代国家の形成を目指した。「学制」は、学問する場所としての学校の有利さを説き、「女子」を含む全人民の小学就学を強調した。長らく、家庭の

存在とされていた女子が世に出ることを要求されたのである。

この時期に、女子教育に携わったふたりの女性がいる。

ひとりは、明治10年（1877）から東京女子師範学校の舎監を28年間に渡り勤めた山川^{ふた}二葉（天保15年〔1844〕～明治42年〔1909〕）である。

もうひとりは、明治8年（1875）に東京櫻川小学校で教鞭を執ったのち、北海道に渡り、函館で女紅場教員、根室で小学校教員、のちに私立根室女子小学校校長を勤めた水野^{てい}貞（嘉永2年〔1849〕～昭和2年〔1927〕）である。

ふたりに関するこれまでの研究は数編¹⁾のみであり、このふたりを同時に取り上げた研究はいまだなされていない。本稿では、明治時代における日本の新しい教育制度と教育内容の樹立、その普及の情勢を各団体や各地方について鑑みるのではなく、ふたりの女性を例に挙げ、個人の功績を中心にして論を進めていく。

明治時代を生きた女性について、個人を取り上げた研究は、各界で偉業を為した文学者や政治家、教育者となった女性に注目が集められてきた。確かに、それ以外の女性についての史料は乏しく、研究対象となりにくいのも承知である。しかし、本稿では明治期において教育に携わった女性自体が総体に少ないながらも、それでも各地方に存在していたあまり名が知れていない女性教育者に注目することにした。

そもそも、このふたりの女性は、幕末期において、会津藩で家老職を拜命していた梶原^{へい}平馬との間にそれぞれ子どもを儲けている。梶原平馬は、会津藩の中樞を担っていたにもかかわらず、明治8年（1875）の記録を最後に忽然と姿を消す。戊辰戦争末期と敗戦という混乱状態のため、会津藩に残る平馬に関する記録は極めて少なく、また、梶原家に伝わる平馬に関する記録については、「幕末から明治維新にも顔をみせたが、その資料も第二次世界大戦の東京空襲で全く失い、今は何もない」（梶原 1980：48）という。平馬の消息は、実に昭和63年（1988）になってから判明した。

山川二葉と水野貞²⁾という個人を取り上げることにより達成しうる目的は、明治時代を生きたこれまで知られていなかった女性像を解明することである。1点目は、女子教育に勤しんだ彼女らの教育方針を探ること、2点目は、仕事をしながら彼女らが自分の子を産み育てることになった事情について明確にし、戊辰戦争で敗北した会津藩の家老であった梶原平馬に関係しながら近代国家形成期を生きた女性がどのような渡世を送ったかを詳解したい。

1) 山川二葉に関する研究については、山川家の人々に関する論文に、名前が登場するのみで（例えば、花見編 1939：7、桜井編 1974：133）二葉を中心とする研究はなされてこなかった。また、水野貞に関する研究については、『根室市博物館開設準備室紀要』に2編（川上・本田 1993、菅野 1996）存在する。

2) ふたりの姓の表記は、錯綜を防ぐため生家の姓で明記する。また、水野貞の名の表記は文献により「貞」「貞子」「テイ」と定まっていない。本稿では頻出の「貞」を採用した。

2. 梶原平馬の履歴について

梶原平馬（天保13年〔1842〕～？）は、会津藩家老内藤介右衛門信順の次男として生まれた。幼名を悌彦とあったが、幼くして、梶原健之助景範の養子となり、梶原悌彦景武と名乗る。梶原家は、「会津藩校日新館の幼年向け教科書『童子訓』によれば、梶原一族の会津家召し出しの発端は甲斐国の梶原景信・景久兄弟の親おもう姿に三代將軍徳川家光が賞賛し、これを聴いた家光異母弟の会津藩祖保科正之が家臣にしたのがそもそもの始まり」（好川 2004：129）という家柄であり、江戸時代初期から、会津藩の重臣を輩出していた。

文久2年（1862）12月、平馬は、京都守護職に就任した会津藩主松平容保に従って上洛した。慶応元年（1865）5月には、江戸常詰の若年寄を任命され、翌年3月、病のため若年寄を御免となっていた兄の内藤介右衛門信節を追い越して、家老職を拝命する（菅野 1994：204）。このとき、梶原家代々の通称名である「平馬」を世襲し、梶原家の10代目の当主として梶原平馬景武と改名した。24歳であった。

山川二葉の生家である山川家³⁾もまた、会津藩で家老職を拝命した経緯を持つ家柄であった。封建社会の近世結婚事情は、「女子は戸主となることが出来ないので、士人の階級中に留らうと望むならば、どうしても其の妻とならなければならない。」（東京女子師範学校 1934：6）と指摘されているように、女子の生きる道は他家に嫁ぐのが至当であり、その嫁ぎ先も主に当人の意志よりも家柄の縁といわれている。平馬と二葉も例外ではなかった。

平馬と二葉が結婚した年はいつなのであろうか。二葉は、天保15年（1844）生まれである。その履歴について、「十七歳のとき、父君失ひ給ひしかば、其後は祖父君と母君との訓育をうけ給ひき、後、同藩の重臣、梶原景雄⁴⁾と申すに嫁きて、一子景清君を給ひ」（黒川編 1910：1）と伝えられている。この「後」が何時のことなのか示す史料は残されていない。

二葉の孫梶原景浩⁵⁾は、明治34年（1901）生まれである。景浩は、二葉の息子景清が36歳のときの子（梶原 1980：139）である。このため、二葉は景清を慶応2年（1866）に産

- 3) 山川家は、二葉の祖父重英^{しげひさ}が、天保11年（1840）に若年寄から家老に昇っていたが、安政6年（1859）に老齢のため、職を退き隠居していた。重英は特に名門の家柄というのではなかったが、その勤勉さとずば抜けた有能さを買われて藩の重役に引き上げられていた（長谷川 2007：44）。重英の跡を継いでいた二葉の父重固は、万延元年（1860）に亡くなった。ゆえに、幕末期において山川家は、その跡継ぎの成長を待っている状態であった。二葉は7人兄弟（他5人は夭逝）の長女であった。長男浩（会津藩家老、のちに東京高等師範学校校長、陸軍少将、貴族院議員）、次女ミワ（夫は会津藩士桜井政衛、和田兵村に入植）、三女操（夫の会津藩士小出光照は佐賀の乱で死亡、宮内庁に入り昭憲皇太后に仕える）、次男健次郎（東京大学・京都大学・九州大学総長を歴任、枢密院顧問官、物理学博士）、四女常磐（夫の山川徳治郎は検事総長）、五女咲子（のちに捨松と改名、夫は薩摩藩士大山巖）である。
- 4) 梶原平馬景武は、明治になってから、梶原景雄と改名した。この史料は、明治期に書かれたものである。改名した名を記したのであろう。

んだことは割り出せる。

二葉が父を亡くした17歳という、文久2年(1862)年である。平馬が役職を拝命した時期と照合して京都・江戸・会津を何度往復したのかという記録がないのが残念であるが、平馬と二葉は、文久2年(1862)～慶応2年(1866)の間に結婚したと考えられる。

平馬は、若くして家老職に就き、京都では、藩外交の表面に立っていた。慶応2年(1867)⁶⁾2月17日、イギリスの駐日公使館書記官であったアーネスト・サトウ⁷⁾の日記に平馬のことが書かれている。

「梶原は、シャンペン、ウィスキー、シェリー、ラム、ジン、水で割ったジンなどを、またたきもせず、尻ごみもせずに飲みほし、飲みっぷりにかけては、他の人をはるかにしのいだ。彼は色の白い、顔だちの格別立派な青年で、行儀作法も申し分なかった。」(アーネスト 1960:241)

これは、大坂に滞在していたアーネストのもとに会津藩士4名(梶原平馬、倉沢右衛門、山田貞介、河原善左衛門)が訪ねた際の記録である。平馬について「格別立派」との評が見受けられる。また、当時の会津藩について、「京都にある戦闘部隊中で最も精鋭な部隊を出している会津藩」(アーネスト 1960:241)と書いている。当時、幕府はフランスと関係が深く、イギリスとは親密ではなかったが、平馬は京にあって幅広い情報源を確立するために奔走していた(菅野 1994:205)。平馬らが、アーネストを訪問した真意は不明だが、外交戦術のひとつであった。平馬らは、絹の紋織や刀剣などの贈り物をしている。その1年後、政局は大きく転換する。慶応4年(1868)1月3日、鳥羽伏見の戦いが勃発、戊辰戦争がはじまったのである。

同年1月12日、15代将軍徳川慶喜は、鳥羽伏見の戦いの敗色を知ると江戸へ引き返してくる。これに伴い、会津藩士も京都を撤退し、江戸に戻った。同月20日、慶喜が会津藩江戸中屋敷(現芝新銭坐邸)を訪れた記録が残る。

-
- 5) 平馬と二葉との間に生まれた梶原景清(海軍軍医学校勤務)の長男である。生没年は明治34年(1901)～昭和54年(1979)。景浩は、文筆家であり、学生時から和歌、俳句、短編小説等を新聞へ投書していた。29歳で処女作『日本好色美術史』(風俗資料刊行会)を出版、主に浮世絵秘戯画、春画等の好色・風俗に関する研究・執筆活動をした。祖母にあたる二葉は、景浩が8歳のとき亡くなった。祖母の思い出を含む遺稿集『会津の人』(八重山書房)がある。
 - 6) 明治6年(1873)に太陽暦を採用するまで、西暦と和暦は符合していない。1867年は、和暦で慶応2年11月26日～慶応3年12月6日までである。また1868年は、慶応3年12月7日～慶応4年9月7日、明治元年9月8日～11月18日である。幕末期の記録は、旧暦で書かれたものであるが、また明治期以降に書かれたものは、幕末期の記録であるのに、新暦に変更されている記録も存在する。本稿では、太陽暦の採用まで旧暦で記し、それ以降は新暦で記すことを断る。
 - 7) 文久2年(1862)～明治15年(1882)まで日本に滞在していた。アーネスト・サトウ著の『日本における一外交官』“A Diplomat in Japan”は、大正12年(1923)にロンドンのシーレー・サービス社から出版された。第二次世界大戦前の25年間は、禁書として扱われていた。昭和35年(1960)に坂田精一により翻訳され岩波書店から『一外交官のみた明治維新』として出版された。梶原平馬をはじめとする会津藩の藩士との交流の様子は、第16章「最初の大坂訪問」に登場する。

慶喜公騎馬にて老中板倉勝静朝臣…其の他奥向騎兵の諸員を従えて新銭座邸を訪ふ。藩相梶原平馬景武、若年寄西郷勇左衛門近潔、之を迎へて先導す。…伏見・鳥羽の敗因を以て幕軍の怯懦に帰す。慶喜公、平馬竝に勇左衛門を召し藩士の勇武を感賞す。

(山川監 1933 : 157)

会津藩江戸中屋敷で慶喜を迎えたのは平馬であった。会津藩の中樞を担い老中職をこなすのが幕末期の平馬の姿であった。

同年2月11日に、慶喜は江戸城を離れ上野の東叡山寛永寺に蟄居する。同月16日に会津藩主松平容保は江戸を総引き上げし、会津へ帰国する。このとき、平馬らは江戸に留まり、横浜で小銃800挺や弾薬などを購入し、長岡藩家老河井継之助、桑名藩主松平定敬らとともに、3月26日、海路で新潟へ上陸した(山川監 1933 : 176)。

4月11日、江戸城は無血開城となり、戦争の舞台は東北地方へと移る。その後、平馬は奥羽越列藩同盟の立役者として活躍するが、その努力も虚しく8月23日、会津の地は新政府軍に囲まれ、会津若松城籠城戦となった。

平馬は、松平容保の側近として「十八倉の陰に敵兵潜居して城兵を狙撃するの恐あるを以て藩相梶原平馬は兵士に命じて倉庫を焼却せしめたり。」(山川監 1933 : 509)などの記述からも分かるように、家老の筆頭として会津戦争の指揮をとり、精悍であった。

3. 会津落城と青森への移住

会津若松城籠城戦は、1ヶ月も続いた。慶応4年(1868)2月末より、江戸常詔の女たちも漸次会津に帰っていた(山川監 1933 : 176)。城の中にいた会津藩士の妻たちは松平容保の姉照姫の総指揮のもとに、600余名が籠城しており、このなかに、山川家・梶原家の女性もいた。

当時、8歳であった二葉の一番下の妹大山捨松⁸⁾は会津戦争の凄絶な様子をアメリカの雑誌に書き残している(例えば、久野 1988など)。24歳になっていた二葉もまた、「城中の男子は何れも戦場に出で、矢石の間に馳驅し、他を顧る暇なきを以て、糧食を調理するは、主として婦人の任務にして、日々握飯を作りて四方防禦の傷處に配付し、又負傷者の看護も、其任する所なりき、加之當時は今日の如き銃を用ひざりしを以て、其銃弾の如きも、方今の物と同じからず、之を製するも容易なりしかば、城中に於て日毎に之を製し以て其缺を補充せしが、是亦、籠城婦人の業務なり」(黒川編 1910 : 2)と残す。

そして「況して、家老職に在る、梶原、山川両家の如き、其妻たり娘たる人は、率先し

8) 山川二葉の一番下の妹である。生没年は安政7年(1860)~大正8年(1919)。会津落城後、咲子から「捨松」と改名し、明治4年(1871)、明治政府が派遣する岩倉使節団に随員し、女子留学生のひとりとして渡米した。帰国後、元老大山巖の後妻となり、鹿鳴館の華と謳われた。徳富蘆花の小説『不如帰』は捨松をモデルにしたと言われ、晩年は風評に苦悩した。赤十字社篤志看護婦会・愛国婦人会で活躍した。

て多くの婦人たちを励まし、且つ其模範たらざるべからず」(黒川編 1910:2) という氣勢を張っていた。山川家の女たちは、日頃から怪我をして体が不自由になるよりも死を望んでおり、誰かが重傷を負った時には、武士の道にならって首をきりおとすことを約束しあっていた(柴 2004:160) といわれている。二葉は、家老の妻としての役目を果たし、まだ幼い子どもを連れての戦争であった。この籠城戦で義姉とせを失っている。

二葉の追悼集『山川二葉先生』に寄せられた生徒の追悼文を読むと、籠城戦の惨憺たる状況を幾人もの生徒に語っていた様子が伺える。例えば、「先生がかの会津落城の生ける歴史談をはじめ給う時は、先生まづ泣きたまひて、われ等みななかされまつりき」(黒川編 1910:38)、「いと勇ましく會津御籠城の御物語をせさせられ一同感に入りて承りたり」(黒川編 1910:53) などの思い出が綴られている。二葉にとって、会津戦争の体験がどれほど壮絶であったのかを物語る。

同年、9月22日、会津は落城し、会津藩は滅藩した。降伏式において、松平容保とともに家臣の先頭に立ち、新政府軍にひれ伏したのが平馬であった(山川監 1933:617)。容保は、江戸謹慎となり、平馬は藩主に従い上京した。

明治2年(1870)9月28日、会津松平家の再興が政府から認められ、翌年に会津藩は「斗南藩」⁹⁾へ移封となった。約1万7000人も会津藩士とその家族が北へ移住した。平馬もまた東京から海路で斗南藩の所領となった青森の上市川村へ移住し、二葉もまた幼い子連れて移住した。

その後、明治4年(1872)の廃藩置県により再び藩は消滅したが、平馬は青森に留まった。『青森県歴史』附録にある官員履歴に、平馬の名が記載されていることから青森県庁に出仕したことが分かる。

青森県貫属土族 斗南県 梶原景雄 通称平馬

辛未十一月三日

一 青森県出仕申付候事

但官等同済迄之処十等月給被下候事

壬申正月八日

一 免出仕

9) 現在の陸奥三郡(青森県三戸上北、下北の三郡と岩手県の一部)と北海道四郡(後志国瀬棚郡、同太櫓郡、同歌棄郡、胆振国山越郡)にあたる。藩名は、中国の詩文「北斗以南皆帝州」からとり、「例え本州の最北の地に流されても、同じく民であり、朝敵でもなければ賊軍でもない。ひとしく北斗七星を仰ぐ帝州の民である。」(猪苗代町編 1982:297) という願いから名付けられたという。しかし、反面「いつかは南へ帰るといふ薩長藩閥政治に対する反骨心も含まれていた。」(葛西 1971:112) との見解もされている。また「南斗六星」からとったのであって、「さそり座を薩長、射手座を会津に置き換え、会津藩を奈落の底に墜した新政府を子々孫々に至るまで未来永劫忘れることなく、きっと見返してやろうという悲憤をこめた。」(塩谷編 1983:77) という見方もある。

(青森県文化財保護協会編 1968:166)

この史料によると、平馬は、明治4年(1873)11月3日から翌年1月8日まで約2ヶ月出仕したのみであった。要職にも就いていない。これについて、他の斗南藩士(旧会津藩士)の官員履歴をみると、数ヶ月で辞めている藩士は少なくない。しかしながら、それらの藩士は「依願免出仕」と記入されている。平馬だけ「免出仕」と記載されているのは興味深い。



写真1 現在の梶原平馬の墓(北海道根室市)

平成18年(2006)5月著者撮影

会津落城後、「生家内藤家は一族総自害、弟武川信臣は江戸伝馬町の獄舎で斬首」(好川 2004:145)され、平馬には生き残ったという苦しみが残ったであろう。「免出仕」は、依願であったのか、懲戒であったのか、それを明らかにする史料は残されていないが、分かることは、平馬は戊辰戦争で共に戦った旧会津藩士たちと明治期には生活しなかったことである。幕末期に会津藩のために奔走し、重要な役割を果たしていた平馬であった。戊辰戦争で敗北してからの平馬は、まるで人が変わったように藩政へ参加することを辞めたことが分かる。

二葉といつ離婚したかについて、その理由と時期について示す史料が残されていない。『山川二葉先生』には「故ありて復籍したまへりき」(黒川編 1910:1)、「明治六年に至り、一家挙りて上京し給ひしか、先生は先に梶原氏と離別の後も、一子景清君を携えて、一身を其教育に委ね給へり」(黒川編 1910:3)としか書かれていないのである。明治6年(1875)に上京したという記録から、平馬が青森県庁を辞職した時期と前後して離婚したのであろう。

その後、平馬は会津に戻っている。『旧斗南士族名籍便覧』に一行だけ「明治八年四月若松県下大町一ノ丁 □上市川村 梶原成馬景雄」と記されていた。青森から会津に戻った平馬は、この記録を最後に消息不明となる。

京から連れ帰った愛人と共に北海道に渡り函館で暮らしている(菅野 1996:63)、遊郭で知り合った女性と逃げた等の噂が流布したと伝わる。

その後、平馬はどこでどう生きたのかという史料は発見されておらず謎のままであった。

昭和63年(1988)、平馬生家筋の内藤信俊家(青森県三戸郡五戸町)で『内藤家過去帳』が見つかった。そこには、「鳳樹院泰庵靈明居子 明治廿二年三月廿三日 北海道ニ於テ病死根室墓アリ 梶原景雄」と書かれていた(好川 2004:146)。「平馬が死去した時、恐らく遺族が兄の信節のところまでそのことを知らせ、信節は誰にも語ることなく、こっそりと紙に書き留め仕舞いこんで置いたものである。」(菅野 1994:208)という。

内藤家は、根室で平馬の痕跡調査をはじめた。この調査の経過は『会津藩に仕えた内藤

一族』に詳しい。半年後、根室の耕雲寺で墓石の場所が判明した（写真1）。後述するが、この墓石発見には、水野貞の功績が書かれた記録が手かかりとなり、平馬の晩年は貞と生活したことが明らかになった。では、平馬と別れたあと、二葉はどう生きていったのか。

4. 山川二葉と東京女子師範学校

山川家に復籍した二葉は、明治6年（1873）に上京する。その後、明治10年（1877）に東京女子師範学校の生徒取締として出仕した（黒川編 1910：4）。二葉が就いた役職「生徒取締」とは、これまで寄宿舍の寮監のこととされている。

東京女子師範学校は、お茶の水女子大学の前身である。その歴史は、明治7年（1874）1月に端を発する。文部少輔田中不二麿により太政大臣三条実美の許に女子師範学校設立の建議書が提出された。「忽にされてゐた女子教育を、時勢の進運に伴って促進させなければならぬ。」（東京女子師範学校 1934：4）という趣旨であった。

同年3月には、文部卿木戸孝允から「今般第一大學區東京府下ニ於テ女子師範學校設立致候條之旨相達候事」（東京女子師範学校 1934：16）との布達が発せられた。

二葉が出仕するのは、これより3年後のことである。その間、女子師範学校のための生徒入学心得書が作られ、生徒の年齢は（特例はあるが）約14歳以上20歳以下と定められ、入学許可には地学事始・物理階梯・国史鑿要等の試験が課せられた（東京女子師範学校 1934：25～29）。

明治8年（1875）8月20日、生徒100名を限って入学を許可し、193人の応募を得る。このときの合格者74名が第一期生となった。同年11月29日、校舎が落成し、開校式が挙げられた。ここに東京女子師範学校が誕生する。

修業年限は、はじめは5年であったが、明治10年（1877）5月に3年半に短縮される。この年に付属幼稚園も開園され、学校の目的が「小学の師範たるべき女子を養成する」ことに改められる。翌年には保母練習科（対象は20歳以上～40歳以下）も設置された（東京女子師範学校 1934：31～40）。

開校まもなく、寄宿舍も併設された。明治8～10年（1875～1877）まで、「取締」が毎夜交互に宿直していた。しかし、新聞に「寄宿生」の監督不行届が書かれ、監督を一層厳密にすることとなり、明治10年（1877）11月19日に正式な「寄宿係」が設けられた。このとき、士族の娘であった近藤とく・藤川さいが任命された。

更に、同年12月13日、「山川二葉氏新たに舎長に任命。山川二葉氏の同校に関係したる初めたるし……隔夜交替宿直寄宿舍監督の実権を収める……山川二葉氏就職によりて舎務の整頓を告げたるならんか」（黒川編 1910：31）とある。

二葉は、女子学生を厳しく監督・教育するために寄宿舍の舎長として出仕しはじめたのである¹⁰。なぜ二葉に白羽の矢が立ったのかは不明である。当時、二葉の弟山川健次郎が東京開成学校（東京大学の前身）の教授補であった経歴からではないだろうか。

二葉の弟や妹は、教育界に携わった人物が多い。弟浩（長男）は、戊辰戦争後、斗南藩

の大参事を勤めたあと、陸軍に出仕し佐賀の乱で活躍した。その後、明治18年(1885)に東京高等師範学校校長と女子高等師範学校校長に任命されている。また、弟健次郎(次男)は、戊辰戦争中は白虎隊(入隊制限年齢15~17歳)に入隊していた。斗南藩再興後、明治4年(1871)にアメリカへ国費留学をし、イエール大学で物理学の学位を取得し帰国する。明治21年(1888)、東京帝国大学初の物理学博士号を授与された。そののち、明治34年(1901)に東京帝国大学総長となり、九州帝国大学、京都帝国大学の総長を歴任している。一番下の妹捨松は、明治4年(1871)、岩倉使節団に女子留学生のひとりとして渡米した。留学中は、看護師の免許を取得している。明治14年(1881)、帰国し、共に留学した津田梅子が女子英学塾(のちの津田塾大学)を開校すると、その運営に参加し尽力した。弟や妹は、明治20年代以降、教育界で華々と活躍していたことが分かるが、長姉である二葉は、東京女子師範学校における仕事を終生に渡り律儀にこなす謹厳な教育者であった。

東京女子師範学校は、明治18年(1885)に高等師範学校女子部と改名となり、明治23年(1890)に女子高等師範学校へと発展していった。これに伴い、二葉も「明治18年9月7日東京師範学校御用掛申付、明治23年3月21日女子高等師範学校舎監、明治24年8月16日女子高等師範学校助教諭、明治25年2月17日女子高等師範学校教諭」(黒川編 1910:6~7)と昇格していき、寄宿舍の舎監だけの出仕ではなかったことが分かる。東京女子師範学校の女子生徒の生活すべてについて規律を正し、道徳を授けた。

二葉の教育方針が伺える記述がある。

女子教育の事漸く其萌芽を發したるのみにして、其方針の如きも、未だ一定せず、男女同権の盛に稱道せらるゝ時なりしが、先生之を正論に有らずとなし、諄々として、女子の従ふべき方針を指示し給へりき、その功勞の著しきこと。(黒川編 1910:4)

つまり、男女同権ではなく、女子は女子の生きる道があるという封建的女性観、つまり武士気質の教えを方針としていたことが分かる。そして、「古風に沈みたることあり或は軽々しく欧米の風俗を模倣して所謂ハイカラに狂奔したるところありき、然るに東京女子師範学校の甚しく其の時弊におちいらざりしは山川二葉氏の功興って利力あり。」(黒川編 1910:29)と書かれているように、欧米主義に抗議している面があった。二葉の妹捨松は、鹿鳴館の華と謳われていたが、正反対であった。「あの人は幾度たづねても同じ格好をして机に向て居る。」(黒川編 1910:65~66)という逸話も残る。

また、日露戦争後、多くの戦死者があったにもかかわらず、陸海軍とも軍人の志願が多くあったことに「実に悦ぶべきである。」(黒川編 1910:35)と言っている。軍国主義で

10) 明治14年(1880)6月15日には、太政官からの布達により文部省所轄学校職員の名称が改められた。学校の組織「寄宿舍監事兼務(教員ヨリ)一副査一寄宿舍長」を新体制として「舎中監事一舎中取締」とするものであった(東京女子師範学校 1934:47)。これにより、二葉は「舎中監事」となった。

ある時代が時代であったが、強い兵士を育てあげる「賢母」の姿の二葉があった。女子にも武士道のような精神を持つように指導し、より強い兵士を生み育てる「賢母」を育成することに力を入れているのが分かる。

その他、二葉に関する評について、「厳正厳格なるお方で犯す可らざる所があったけれども実に温情溢るるばかりで親しみ易い所があった。恭しき慎み深い所が見えて居てもすこしも窮屈な感じを人に起こさせなかった。」(黒川編 1910:22) ともある。厳しくかつ優しくあった二葉であった。明治37年(1904)に退職した際には、当時の文部大臣久保田譲より感謝状を受け、従五位¹¹⁾を授与されている。

二葉の晩年は息子景清とともに過ごした。孫である梶原景浩の遺稿集には、「祖母のお土産人形」という章がある。二葉が維新前から大切に持っていた京都の古い人形の逸話であった。その人形は会津戦争中は、乳母の農家に預けており、二葉が斗南藩移住の際にも「可憐な八躰の人形達を身から離さず、ずっと身辺においておいた」(梶原 1980:89)ものであった。

これは、「会津藩は孝明天皇の信任が篤かったというから、祖父の平馬景武も松平容保に従って、京都に赴く機会も多く、そこで購めて新婚の祖母への土産物」(梶原 1980:90)であったらしい。二葉の死後、人形は息子から孫へ伝えられ、第二次世界大戦時も疎開先へ持っていかれ戦火を逃れた。この逸話からは、二葉が晩年も平馬との結婚生活を忘れていなかったことが分かる。

また、「会津落城の版画」という章には平馬に関する逸話がある。それは、会津藩の降伏の様子を描いた錦絵の版画を古本屋にあったのを見つけた景浩の大叔父が「浩ちゃんのお祖父ちゃんがでている」と報告したのに対し、大叔母が「それであったら購っておいてあげればよかった」といったという内容(梶原 1980:95)である。会津若松城の天守閣の前で「梶原平馬」らが薩摩藩士の前に坐している版画であった。その後、景浩は錦絵を丹念に調べた。ここから、景浩が行方知れずになった「祖父」梶原平馬を疎ましく思っている様子は見受けられない。

現に、二葉は復籍したが、息子に「梶原」を継がせ、孫も「梶原」を名乗っている。これらから、二葉は(行方知れずとなった)平馬に対して恨み辛みの想いはなかったことが分かる。

二葉の同僚であった野口保興の談には、「非常に武士気質で真正面の方でいらつした。……このもえる様なあつい情は嫁して後、夫をおもひ子を思ふ又舎監として生徒の上をおもはれたうつくしいありがたい情になってあらはれてをる、先生は不遇にして随分辛苦もせられ不幸にして梶原家より離籍せらるる様なこともおありでしたが決して梶原家を忘れてはをられぬ、御子息現に海軍々□中盤をちやんと立派にそだてあげてをられる、その又御孫の御世話のなさり様などもいぢらしきまで親切でありました。」(筆者傍点)(黒川編 1910:

11) 主に華族の嫡男が授与される位である。

25～26) とあった。

つまり、彼女は「結婚している」という状態に固執せず、梶原家に嫁いだ責任を果たした。明治維新後、平馬との子を大切に育て上げ「賢母」となった。その間、東京女子師範学校に奉職、ここでも数多くの生徒の「賢母」となり、「賢母」を育て、女性教育者としての生涯を全うしたのであった。

5. 水野貞と平馬の死後について

梶原平馬をめぐるもうひとりの女性である水野貞は、嘉永2年(1849)水野謙吉の三女として江戸で生まれた。水野家は新五番町(現千代田区)で能楽を教える家であった。

貞の履歴を示す史料として、『北海道立志編』¹²⁾がある。明治37年(1904)に編まれたもので、貞は「梶原貞子」という名前で紹介されている。「三十五年根室公立女子小學校の訓導に轉じ今現に其の職に在り」(梶川編 1904: 59)とあることから、出版当時は、まだ現役の教員として教壇に立っていたことが分かる。記事は取材に応じて貞本人が話したことを纏めて書いたものである(菅野 1996: 36)。

江戸の私塾で和漢学・数学を学び¹³⁾、明治8年(1875)より、東京櫻川女学校の二等授業生として教鞭を執っていた。その後「明治十一年良縁あり。青森県土族梶原景雄氏に配し貞淑温良克く夫に仕へて家政を整へ良妻の褒れ高し」(梶川編 1904: 58)と書かれている。この記録が、根室での平馬の墓発見の大きな手がかりとなった。平馬と貞はどこで知り合ったのかは明らかになっていない。家柄の縁ではないことは確かである。

その後、「明治十四年夫景雄氏に従ひ、函館赴き内助の餘暇教鞭を函館女工場に執り、同年十一月廿一日根室花咲小学校に轉任し教鞭を揮って子女を教ゆる」(梶川編 1904: 58)とある。この記録には「女工場」とあるが、明治14年(1881)当時、函館に開所していたのは「女紅場」であり、記述間違いと思われる。女紅場とは、明治5年(1872)に芸娼妓を解放する太政官布告が出され、解放後の芸娼妓の品性向上、生活の道を立てさせるのを目的とする教育機関で、洗濯・裁縫・紡織・学問の4科を課したものであった。北海道では、函館・根室の二港に設けられた(寺島 1951: 639)。貞はこの女紅場の教員として勤めたのである。

明治の開拓時代、北海道は「男多女少」だった。それは、明治以前、渡島半島を治めて

12) 明治の初期に北海道の地に土着して各界で開発事業に多大な貢献をした1450余人に及ぶ先人達の経歴を収録している。全五巻。編纂にあたり、内容の正確を期するため、社員を全道各地に派遣して直接本人に面接して取材・調査に当たり、発刊を計画して約10年もの歳月を費やし出版された(菅野 1996: 63)。

13) 履歴には「和漢の學を宮原青雪師に學び、更に数学を神田小川町の集天舎に終む」(梶川編 1903: 58)とあった。学制発布以前に成立していた私塾の名簿は整備されておらず、所在不明であったが、菅野論文(菅野 1996)には、その在処を調査した経緯が載っている。それによると、塾は貞が生まれた新五番町からほど近い平河町にあり、慶応3年(1867)当時、男子200名、女子30名を抱える大きな塾であったことが明らかにされた。

いた松前藩の和人の女人禁制の伝統（女性が積丹半島の岬を越えてはならないという禁忌。「神威岬越え」と呼ばれている）に由来している。それは、松前家が蝦夷地と和人地とを区分し、往来を自由にさせない政策をとってきたからであり、ことに女性を入れることは定着につながったからである（海保 1986：12）。

安政2年（1855）になると、松前藩より蝦夷地の引渡しを受けた箱館奉行は、アイヌ女性を妾にする支配人や番人が増えたため、その禁忌を解き、それより妻子ともに北へ移住することが可能となった。

明治維新を迎え、蝦夷地は北海道と改称される。多くの人々が新天地を求めるとともに、殖産興業の任を担い、津軽海峡を越える。北海道ほぼ全域にわたり、士族授産政策の一環であった屯田兵をはじめ、団体移住、個人移住などさまざまな形で入植がなされ、土地の開拓や酪農等が行われる。

明治期における移民の女たちの記録は希少である。日記や書簡を残すのは、読み書きが堪能な旧藩士や戸主（主に男性）であったことが一番の原因であるが、「男多女少」であったことも影響している。

海保論文（海保 1986）によると、開拓期の男女比率はひどく不均衡であった。明治5年（1872）の札幌区の人口を例に挙げると、男656人、女366人であった。女性が少ないがために貴重品視され、あたかも物品のように金銭で売買する売春婚の横行、芸娼妓の大流行、私生児の増加、一夫を守らぬ女尊男卑が横行した（海保 1986：25）。

その後、明治26年（1893）に調査された北海道全体の人口をみると、男303733人、女256226人となり、女性の比率は改善されているが、それでも男性が多いことには変わりなかった。

このような状況下、貞は北海道に渡り教員となったのである。貞の長女シツエの『戸籍原本写』¹⁴⁾（根室市歴史と自然の資料館所蔵、以下同）をみると、「明治11年5月2日生まれ」と記載されていた。つまり、北海道へ渡る前に一児を出産して、まだ4歳になる前の子どもを連れての移住であった。このあと、長男（夭逝か）、明治18年（1885）に次男文雄を出産しているが、平馬が仕事に就いた記録はない。

貞は、すぐに函館の女紅場を離れ、明治14年（1881）頃から明治20年（1887）に退職するまで根室にある花咲小学校に勤務した（川上・本田 1993：47～52）。退職した理由が書かれた書類が残っていないが、「二十二年夫景雄氏不幸病んで又起つ能はず。」（梶川編 1904：58）という記録がある。平馬が病気に臥したため、明治20年頃に退職したと推察される。明治22年（1889）3月23日に平馬は亡くなった。平馬の死後、幼い子が残された。

その後、「悲痛哀哭の亡き夫に対する勤めにあらざるを了し身は可翳き女流なりと雖も

14) 根室市歴史と自然の資料館所蔵の史料である。学芸員本田克代氏が収集したものと思われる。『戸籍原本写』は、昭和63年（1988）に根室市役所から取り寄せたもので、10枚ほど存在する。現在、収蔵庫にあるダンボールに詰まっているだけで、整理がなされていない。本稿では、それらの史料を用いたが、更なる史料の発掘とその分別、整理を課題としたい。

見事に子女を育し亡き夫の志を纏かしめんと雄々しくも決意し奮って根室女子小學校を興し施設一に其の衝に當り自ら教鞭を執って教育に従ふ。」(梶川編 1904: 58) と記録されている。

同年6月7日、貞は、根室にある5寺の各住職と相談し、私立の根室女子小學校を開校させた¹⁵⁾。40歳になっていた貞が校長となり、4名の教員を在籍させた。生徒は150名を数えたという。学校の経営は、各寺院の賽銭や火葬料で賄った。つまり、ほぼ無償で教育に勤んでいたのである。貞はどのような教師であったのか。「日常黒の被布を着た、切り下げ髪の背の低い、然し姿勢の正しい女教師の面影は、今だはっきりと臉のうらに映る。」(寺島 1951: 641) と教え子が残している。

明治32年(1899)、生徒数増加のために私立根室女子小學校は閉校し、生徒は花咲小學校と弥生小學校に分散し、教員もそれぞれの學校に勤めた。貞は再び、花咲小學校に勤めた。この頃、姓を「梶原」に変えたという。

その後、花咲小學校は男子のみの通学となり、明治35年(1902)、女子のみの通学である根室女子尋常高等小學校(旧弥生小學校)へ転任した。明治38年(1905)当時、生徒数673人、教員12人の小學校であった(川上・本田 1993: 53~57)。

明治41年(1908)、息子文雄が亡くなった。『戸籍原本写』をみると、明治44年(1911)6月、文雄の養子縁組がなされ、根室の青柳家からクラを迎えている。川上・本田論文には、大正7年(1918)ごろ、「水野」「青柳」という表札が掛かっている家を見たという聞き取り(明治37年生まれ、若松キリ氏談)があるが、彼女の大正期の生活については不明な点が多い。明治43年(1910)に小學校を退職し、昭和2年(1927)に77歳で亡くなった。

息子の文雄は22歳で亡くなるが、15歳のとき、東京にある日本中學校に進学した(川上・本田 1993: 57)。そのときの活動の様子が残っている。

それは、明治33年(1900)に根室郷友会をつくり、同志と機関誌『北友』を発行したのである。巻末にある会員住所には「東京市小石川区久堅町37番地山川方日本中学卒業生水野文雄」と書かれていた。この住所は山川二葉、梶原景清の住所であった。文雄は二葉のもとに下宿していたのである。つまり、二葉と平馬は親交があったのであろうと推察できる。

『戸籍原本写』には、水野家を除籍する旨が書かれた書類も存在する。それには、水野文雄は「景雄亡三男」とあり、「明治二十三年九月立日梶原景清弟ヲ水野シツエ実弟ニ付引き受ケ」、水野シツエは「明治二十三年九月九日梶原景清妹ニ付引き受トナル」という驚くべき記述があった。

15) 貞の教え子であった郷土史家寺島証史は、『根室郷土史』のなかで、「根室に良家の子女を教える私塾が生まれた。会津出身の女流教育家水野貞子(のち梶原と改姓)によるものである。」(寺島 1951: 640) と書く。会津出身でもなく、籍も入れてはなかったが、貞にそのように教わったのであろう。

現在、史料はこれしか残っていない。しかし、根室での平馬の訃報は山川家に伝わっていたのではないだろうか。貞が梶原姓に変えたのは明治32年（1899）であったが、シツエはその前から梶原姓を名乗っていた（明治30年〔1897〕当時の私立根室女子小学校の助手には「梶原シツエ」という名がみられる）。

文雄は水野姓のままであったが、上京し、山川家に下宿した。東京から戻ると、死の直前の明治40年（1907）まで小学校の代用教員として花咲小学校に勤務していたという。

さて、昭和63年（1988）に内藤家で発見された『内藤家過去帳』に書かれていた根室に梶原平馬の墓があるという記述から、根室で調査がはじまったと前述した。『北海道立志編』『根室郷土史』に書かれていた貞の残した功績に付随して「梶原景雄」の名前があり、「梶原景雄」と「会津藩家老梶原平馬」が一致し、墓の発見や平馬の晩年を解明する手がかりとなったのである。

昭和63年（1988）9月29日の北海道新聞の夕刊に「梶原平馬根室に眠る」という記事が掲載されている。これは、戊辰120年目にして平馬の明治期の足跡が明らかになったことを大々的に取り上げた記事であった。

しかし、山川家、とくに二葉は、根室で水野貞と暮らし、子どもを儲けたという平馬の最期を知っていたのではないだろうか。異母兄弟の文雄と景清は同じ青年時代を過ごしていた。二葉は、文雄とも接したであろう。そこで、文雄へなされた教育を知り、それが貞の教養、教育方針、そしてその人自身も認めていたのかも知れない。

6. おわりに

本稿では、幕末期に会津藩家老の任に就いていた梶原平馬を軸に、女性教育者山川二葉・水野貞について注目した。太政官より「学制」が發布され、女子教育の必要性が唱えられた黎明期であった。ふたりが女子教育に熱心に取り組んでいた頃（明治10年代～明治30年代）の女子就学率は未だ50%未満¹⁶⁾であった。

明治20年（1877）、初代文部大臣に就任した森有礼は、明治初期の全般的な教育風潮とは趣を異にする提唱をした。それは、「女子ハ其子ヲ生メハ直チニ其養育ニ従事スヘキ天然ノ教員ニシテ・・・夫レ女子教育ノ主眼トスル所ヲ要言セハ、人ノ良妻トナリ人ノ賢母トナリ。」（大久保編 1972：34）という演説であった。

いち早く近代国家として成立し国際社会の一員として認められるために富国強兵、殖産興業が強く謳われていた。すなわち、国家のために尽くす人材が要求され、その人材育成のために、まず将来の母親としての女子を教育する必要があった。男女は、教育を受けること自体に差はなかったが、女子の場合には、それが将来の賢母という観点から期待され

16) 全国の学齢女子の就学率について、例えば、明治10年（1877）は22.48%（男子55.97%）、明治15年（1882）は33.04%（男子66.99%）、明治20年（1877）は28.26%（男子60.31%）、明治25年（1892）は36.46%（男子71.66%）、明治30年（1897）は50.86%（男子80.67%）という記録がある（阿部・佐藤 2000：33）。

た。

民法典論争のあと、明治29年(1896)、明治民法がようやく制定された。家・家族に対して絶対的支配権を持つ戸主制度であり、結婚し、妻となった女性を戸主＝夫の支配下におき、妻は夫の家に入る、子は父母の強い権限の元に置かれ、女性は25歳まで父母からの結婚の許可が必要である等と規定された。このような明治民法の成立は「妻たる女性を夫の管理・統制下に置いた。女性は独身を貫く事は経済的・精神的に困難であったから多くの女性は結婚し妻とならざるをえなかった。」(阿部・佐藤 2000:27)と指摘されている。

明治民法成立の僅か前、夫不在で子どもを育て、仕事を持っていた女性が二葉と貞であった。本稿では、彼女らの「夫」であった平馬の履歴をも追った。平馬の気質は彼女らに影響したのだろうか。平馬は、幕末期には、格別立派な青年と評される会津藩の中樞を担う武士であった。戊辰戦争中も武器集めに奔走し、会津籠城戦では、筆頭家老として指揮を執り活躍していた。しかし、明治時代になってからは、歴史の表舞台からは消え、根室でひっそりと亡くなる。

目的の1点目であった彼女らの教育方針について、平馬の幕末期を知っていた二葉は、会津藩で培った封建的女性観を持っていたと考察できる。会津戦争の体験を生徒に伝え、品行方正な女性を厳しく育成する女子教育に勤しんだ。頑なに賢母を育成するのを貫いたのである。

片や平馬の晩年を知っていた貞は、無償の私立小学校をつくり、地道な教育活動を行った。開拓がはじまってまもない北海道、しかも男多女少という状況下で主に女子児童に教育を普及したという事実は、開明的な面を持っていたと考察できる。

彼女らは、同じ梶原平馬という男を介在していた。ふたりが接見したのかどうかは分からない。二葉と貞に共通するものは、夫である平馬に頼らず「女性教育者」としての人生を貫いたことであった。平馬は、近代国家形成期を強く生きるふたりの女性の姿を残した。

近代国家が成立するとともに、「国民」は個性よりも性別により生き方が規定され、特に女性は男性に比べ非対称的な性別役割分担がなされるようになった。シモーヌ・ド・ボーヴォワール(Simone de Beauvoir, 1908～86)は、既婚女性の家庭生活の特徴を分析している。その特徴は、女性は男性に寄生している、女性は夫・子どもという「代理」により自己正当化している、女性は「種の存続」と「家庭の継続」のための「反復」のみである(掛川 1992:74)と整理された。日本では、大正デモクラシーの高揚とともに「女性解放論」が広く唱えられたが、女性を閉じ込めているもののひとつに「結婚」という制度そのものが挙げられるのである。

近代国家を生き延びた西洋、そして日本の大多数の女性が送った人生とは異なり、二葉と貞は、明治期において、夫に依存することなく子を育て、家庭以外に仕事を持ち、人生を自らの力で歩んだ生涯を送った女性であった。その環境で二葉は海軍軍医、貞は小学校教員に子を育て上げ、賢母となる母親の役目も怠らなかつた。これが、2点目の目的の答えと

なった。梶原平馬の存在は、彼女らの人生をより生きるに値するものに変化させたのである。

本稿では、山川二葉・水野貞の履歴の概略を追うことに終始したため、考察しきれ得ない史料があった。今後の課題として、二葉・貞を各々取り上げ、その女性像をより明確にしていきたいと思う。

(付記) 本稿を作成するにあたり、根室市歴史と自然の資料館学芸員猪熊樹人氏、国立国会図書館には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

引用文献

- アーネスト・サトウ 1960『一外交官のみた明治維新』上 坂田精一訳 岩波書店
青森県文化財保護協会編 1968『青森県歴史』第3巻 みちのく双書
阿部恒久・佐藤能丸 2000『日本近現代女性史』芙蓉書房
猪苗代町編 1982『猪苗代町史』歴史編 猪苗代町史出版委員会
大久保利謙編 1972『近代日本教育資料叢書人物篇一 森有禮全集』第一巻 宣文堂
海保洋子 1986「えぞ地の頃―幕末」「開拓時代の生活」『北の女性史』札幌女性史研究会編 北海道新聞社 pp.10～25
掛川典子 1992「西洋近代の女性論」『女性学』伊藤セツ・掛川典子・内藤和美編 同文書院 pp.50～79
葛西富夫 1971『斗南藩史』斗南会津会
梶川梅太郎編 1904『北海道立志編』第三巻 北海道圖書出版合資会社
梶原景浩 1980『梶原景浩遺稿集・会津の人』八重山書房
川上淳・本田克代 1993「私立根室小学校校長〔水野貞〕事跡」『根室市博物館開設準備室紀要』第7号 根室市博物館開設準備室 pp.47～61
久野明子 1988『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』中央公論社
黒川龍編 1910『山川二葉先生』(非売品、櫻蔭会)
合田一道編 2004『人間登場―北の歴史を彩る―』第3巻 北海道出版企画センター
桜井懋編 1974『続山川浩』(非売品、続山川浩伝刊行会)
塩谷七重郎編 1983『土津神社と斗南』土津神社
柴桂子 2004「近世・幕末維新期の戦争と女性」『戦争・暴力と女性Ⅰ 戦の中の女たち』西村汎子編 吉川弘文館 pp.159～170
菅野恒雄 1994『会津藩に仕えた内藤一族』(非売品、歴史春秋出版制作)
菅野恒雄 1996「東京で生まれ育ち教鞭を執った梶原平馬二度目の妻貞子の事跡」『根室市博物館開設準備室紀要』第10号 根室市博物館開設準備室 pp.63～70
千住克己 1967「明治女子期女子教育の諸問題―官公立を中心として―」『女子教育研究双書2 明治の女子教育』日本女子大学女子教育研究所編 国土社
寺島証史 1951『根室郷土史』岩崎書店
東京女子師範学校 1934『東京女子師範学校六十年史』(非売品、東京女子師範学校)
長谷川一夫 2007「山川健次郎」『会津若松市史18文化編 会津の人物』会津若松市史研究会編 会津若松市

花見朔巳編 1939『男爵山川先生伝』岩波書店

山川健次郎監修 1933『會津戊辰戦史』會津戊辰戦史編纂會

好川之載 2004「梶原平馬一北辺に消えた会津藩最後の筆頭家老一」『幕末・会津藩士銘々伝』上巻

小松山六郎・間島勲編 新人物往来社 pp.127～150

(えんどう ゆきこ 女性文化研究所特別研究員)